

ベトナムにおける小児上気道由来と髄液由来インフルエンザ菌に対する分子疫学的検討

加地 千春 渡辺 浩 渡辺 貴和雄 大石 和徳 永武 毅

長崎大学 熱帯医学研究所 感染症予防治療分野

【目的】ベトナムにおける小児のインフルエンザ菌性感染症の現状を明らかにする目的で以下の検討を行った。【対象と方法】ベトナム、ハノイ市の市中病院で小児の急性呼吸器感染症患者の上気道より分離されたインフルエンザ菌37株と髄膜炎患者の髄液より分離された同菌44株についてMIC（寒天平板希釈法：NCCLSのガイドラインに準じて）を測定し、血清型、 β -lactamase産生、パルスフィールド電気泳動（PFGE）について検討した。【結果】上気道由来株、髄液由来株に対するそれぞれのMIC₉₀値（ $\mu\text{g/ml}$ ）はampicillinが32, 8、ceftriaxoneが0.016, 0.008、imipenemが2, 1、erythromycinが4, 4、levofloxacinが0.032, 0.032であった。上気道株中26株は β -lactamase産生菌で11株は非産生菌であり、髄液由来株中23株は β -lactamase産生菌で21株は非産生菌であった。血清型は上気道株ではnontypeable 30株、type b 4株、type c 2株、type a 1株であったが、髄液由来株は全てtype bであった。PFGEによるDNAパターンは上気道由来株は22パターンに分類され幅広く分布していたが、髄液由来株は9パターンであり、その中でもaパターン22株、bパターン12株と優位なパターンが存在した。【結論】今回の検討では髄液由来に比べて上気道由来のインフルエンザ菌は β -lactamase産生菌が多い傾向があったが、薬剤感受性には大差はなかった。また髄液由来株は全てtype bであったが、PFGEパターンでは2つの優位なものが存在し、今後これらの菌の感染経路の解明が望まれる。（共同研究者） Nguyen Thi Hien Anh、Phan Le Thanh Huong、Dang Duc Anh

Molecular analysis of *Haemophilus influenzae* isolated from nasopharyngeal aspirate and cerebrospinal fluid among children in Vietnam

CHIHARU KAJI

Department of Internal Medicine, Institute of Tropical Medicine, Nagasaki University, Japan